メッセージ　2

祈りの人

聖書：ヨハネ10:30．14:30後半．15:7．ルカ11:5-13．列王上8:48．
ダニエル6:10．マタイ26:39

Ⅰ．主イエスにおいて、わたしたちは福音書の中で啓示された祈りの人の純粋な模範を見ます――マタイ14:23．マルコ1:35．ルカ5:16．6:12．9:28：

Ａ．祈りの人として、主イエスは常に神と一でした――ヨハネ10:30。

Ｂ．祈りの人として、主イエスは絶えず神の臨在の中で生きました。主イエスはわたしたちに告げましたが、彼は決して独りではなく、御父が彼と共におられました。彼は瞬間ごとに、御父の御顔を見ていました――使徒10:38後．ヨハネ8:29．16:32後半．参照、出33:14．Ⅱコリント2:10。

Ｃ．祈りの人として、主イエスはどのような苦難や迫害の下にあっても神に信頼し、自分自身に信頼しませんでした――Ⅰペテロ2:23後半．ルカ23:46。

Ｄ．祈りの人として、主イエスは人であって、彼の中ではこの世の支配者であるサタンは何も持ちませんでした（何の立場も、何の機会も、何の望みも、何事においても何の可能性も持ちませんでした）――ヨハネ14:30後半。

Ⅱ．祈りの人は真実な祈りをし、以下の特徴を持っています：

Ａ．祈りの人は自分自身を神の中へと祈り込んで、御父から命の供給を受けます。これは、ルカ第11章1節から13節で記述されているようにです：

１．わたしたちの祈りの意図は、命の供給を尋ね求めることであるべきです――パンは地上の豊富を表し、魚は海の豊富を表し、卵は空中と地上の物の豊富を代します――5-13節。

２．これらの豊富の総合計は聖霊です。わたしたちは自分自身を神の中へと祈り込むとき、神の中にとどまって、聖霊をわたしたちの命の供給として受けるべきです――11-13節。

３．この命の供給は、わたしたちを養うだけでなく、わたしたちの顧みの下にいるすべての人をも養います――参照、Ⅰヨハネ5:16前半．Ⅱコリント3:6．使徒6:4。

４．もしわたしたちの祈り方がわたしたちを主からそらし、わたしたちを主の中へともたらさないなら、わたしたちは祈り方を変えるべきです。祈りとは、わたしたち自身を神の中へと祈り込むことです。

5．祈りとは、わたしたちが自分自身によっては、自分自身をもっては、自分自身の中では、自分が無であることを認識することです。ですから、わたしたちは何事も自分自身で行なうことを願いません。そうではなく、わたしたちはすべての事を神の中で、神と共に、神を通して行ないたいのです。

6．わたしたちの祈りは、神がわたしたちの中へと入って来て、わたしたちを満たし、わたしたちの存在そのものに浸透するための道を神に与えます。その時、わたしたちが行なう働きは、神への完全な信頼の中でのみ行なわれます。

B．祈りが意味するのは、わたしたちが無であり、わたしたちが何もできないことを認識することです。これは、祈りが真に自己を否定することであることを暗示しています――マルコ8:34．9:29：

1．祈りとは実は、「わたしではなく、キリスト」であると宣言することです。わたしたちの祈りは、わたしたちが自分の努力を用いてどのような状況も取り扱わないことを証しします――ガラテヤ2:20。

2．「おお、主イエスよ！」と主の御名を呼び求めるそのような短い祈りでさえ、「もはやわたしではなく、キリスト」であることを示しています――ローマ10:12-13。

C．わたしたちは神がわたしたちの祈りを聞いてくださるために、聖なる地、聖なる都、聖なる宮によって表徴されている神の権益に向かって祈る必要があります――列王上8:48：

1．聖なる地は、神が信者たちに割り当てた分け前としてのキリストを予表します（コロサイ1:12．2:6-7．申8:7）。聖なる都は、キリストにある神の王国を表徴します（詩48:1-2）。聖なる宮は、地上での神の家、召会を表徴します（エペソ2:21．Ｉテモテ3:15）。

2．バビロンの捕囚の期間、ダニエルはエルサレムに向かって窓を開き、日に三度、祈りました。これが示しているのは、神に対するわたしたちの祈りが、神の永遠のエコノミーにおける目標としてのキリスト、神の王国、神の家に向けられているとき、神はわたしたちの祈りを聞いてくださるということです――ダニエル6:10。

3．これが意味するのは、わたしたちがだれのために祈っているとしても、わたしたちの祈りは神の権益に照準を合わせるべきであるということです。すなわち、わたしたちの祈りは、地上における神の権益としてのキリストと召会に照準を合わせて、神のエコノミーを完成するためであるべきです。

Ⅲ．祈りの人は、神と神のみこころを求める人でなければなりません――マタイ26:39．ヨハネ4:34．5:30．6:38。

Ⅳ．祈りの人は、神の中に生きて常に神と交わりを持っている人でなければなりません――15:7．Ⅰヨハネ1:3。

Ⅴ．祈りの人は、アブラハムの模範にしたがって、絶えず神の御前で待ち望む人でなければなりません：

Ａ．アブラハムが神の御前でなした栄光のとりなしは、二人の友人の間の親密な会話、神の心の願いを明らかにすることにしたがった人間的で親密な談話でした――創18．ローマ4:12．歴代下20:7．イザヤ41:8．ヤコブ2:23．雅1:1-4．啓2:17．Ⅰテモテ2:1，8。

Ｂ．神は死ぬべき人の形でアブラハムに現れ、人の水準でアブラハムと交流しました――創13:18．18:1-2，13-15。

Ｃ．アブラハムは、神との甘い交わりを享受していた時、イサクの誕生とソドムが滅ぼされることに関する啓示を神から受けました――9-22節：

１．これが示しているのは、神の意図はキリストをわたしたちの中へと造り込んで、わたしたちを通してキリストを生み出し、そしてわたしたちの家庭生活、仕事の生活、クリスチャン生活、召会生活の中の「ソドム」を滅ぼすことです――ガラテヤ1:15-16．2:20．4:19．Ⅰコリント5:8。

２．わたしたちは、神との親密な交わりの中で啓示を受けて、すべての不可能はキリストがあれば可能になることを見ます――創18:14．ルカ18:27。

Ｄ．神がアブラハムに、ソドムを滅ぼすというご自身の意図を啓示したのは、神がとりなす者を求めておられたからです――創18:17-22．参照、ヘブル7:25．イザヤ59:16．エゼキエル22:30。

Ｅ．創世記第18章は、とりなしの基本的な原則の明確な啓示を提示しています：

１．正しいとりなしは人によってではなく、神の啓示によって始められます。こういうわけで、正しいとりなしは神の願いを表現し、神のみこころを完成します――17，20-21節．19:27-29．詩27:4-8．ヘブル4:16．7:25．ヤコブ5:17。

２．一見して、アブラハムはソドムのためにとりなしていました。実は、彼は暗示によってロトのためにとりなしていました（創14:12．18:23．19:1，27-29）。これは、わたしたちがこの世へと押し流されていった神の民のためにとりなすべきであることを示しています。

３．とりなしは、神の心の中の意図にしたがった神との親密な会話です。このことのために、わたしたちは神の臨在の中にとどまることを学ばなければなりません――18:23-32．マタイ6:6。

４．とりなしは、神の義なる道にしたがっています。ロトのためのアブラハムのとりなしの中で、アブラハムは神の愛と恵みにしたがって神に懇願したのではありません。アブラハムは神の義なる道にしたがって神に挑戦したのです――創18:23-25．ローマ1:17。

５．アブラハムのとりなしは、アブラハムが語ることで終わったのではなく、神が語ることで終わりました。これが示しているのは、真のとりなしは、わたしたちが語ることの中で神が語ることです――創18:33．ローマ8:26-27。

Ⅵ．祈りの人は、自分のすべてを放棄する人、特に自分の能力と意見を放棄する人でなければなりません――使徒10:13-15。

Ⅶ．祈りの人は、進んでどんな代価でも払って、神のすべての要求に応じる人でなければなりません――Ⅱコリント12:7-10。

Ⅷ．祈りの人は、その生活と祈りが符号する人でなければなりません――1:12．2:10．Ⅰテサロニケ5:17．参照、マルコ11:22．ヘブル11:5-6。

©2012 Living Stream Ministry